

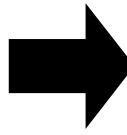
コミュニケーションや関わり…等の特性

コミュニケーション

- ・言語/会話理解
 - ・字義通りの解釈
 - ・抽象的な表現の理解
 - ・声のボリューム
 - ・相手との距離感
- …等

関わりや社会性

- ・対人関係の様子
 - ・枠組みの理解
 - ・客観視する力
 - ・興味の共有
 - ・感情コントロール
- …等



コミュニケーションでは言葉だけではなくボディーランゲージ等も含めたコミュニケーションスキルの状況や、コミュニケーションがはっきりと人に向かって発信されているかというようなことや、抽象的な表現の理解、距離感など、相手とのやりとりの状況に関して違が出てくることがあるかもしれません。関わりや社会性の特性では相手を含めた社会との関わりや求められていることの理解などの暗黙のルールの理解、自分を客観視する力や相手との気持ちの共感などについても違いがでてくる可能性があります。例えば、子どもたちの行動から見てみると療育の中で「あとで公園にいくからね」とスタッフが子どもにお伝えした時に、「あとで」の意味がわからないといつけるのかと、なんど質問してしまうかもしれません。これは抽象的な表現の理解の特性になりますね。また、「公園にいくからね」と後ろの部分だけを聞き取って今いけるものと勘違いしてしまう場合もあるかもしれません。これは言語理解の特性に関連するかもしれません。子どもの特性をわかっていると伝え方に気をつけようなどのアプローチを考えることができます、特性がわからないと、「あとで」と言ったのになんでわからないんだろうという視点になってしまいがちです。他にも、療育中に他のお子さんがルールが守っていない時に注意はするが自分が守れていないとも平気なそぶりをしているお子さんもいるかもしれません。これは客観視する力や場や求められていることの理解の特性に関連しているかもしれません。いくつか例をあげましたが、コミュニケーションや関わりの特性は、相手や場面が変わると見られる行動も変わる可能性がありますので、注意深くみていく必要があります。

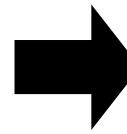
認知や記憶…等の特性

認知や記憶

- ・記憶の特徴
(長期/短期/
ワーキングメモリー)
 - ・アカデミックスキル
 - ・情報のとらえかた
- …等

思考や想像力

- ・興味関心
 - ・変化への対応
 - ・こだわり行動
 - ・カテゴリーの理解
 - ・般化の理解
- …等



この項目では記憶や情報の捉え方や学習スタイル、想像力の柔軟性などについて違いが見られます。認知や記憶では、記憶の特徴について違いが見られるかもしれません。思考や想像力では、本人なりの興味関心、変化への予測や対応の仕方、概念やカテゴリーの理解、持っている力を別の場面で応用したり発揮する力について違いがでてくる可能性があります。例えば、子どもたちの行動から見てみると、過去の衝撃的な記憶に関してはいつまでも覚えていたり、場面によってフラッシュバックのように思い起こすことがある子どももいれば、気がそれてしまうと今行っていたことを忘れて次のことをやり始めるような子どももいるかもしれません。これは長期記憶やワーキングメモリーの特性に違いが見られるかもしれません。他には、療育でできたことがなかなか家でできなかったり、スタッフが変わるとうまくできないというようなこともあるかもしれません。また、急な変化や、環境の変化に敏感なお子さんもいるかもしれません。これは、般化や応用する力や、変化への構えや対応の特性に違いがあるかもしれません。認知や記憶、思考についての特性は、バランス脳タイプの子どもの特性とは違いが大きいこともありますので、子どもも自ら見していく必要があります。

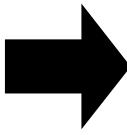
注意の向け方…等の特性

注意の向け方

- ・注目の仕方
 - ・注意の転動性
 - ・注意の持続力
 - ・視野
 - ・集中
- …等

衝動性等

- ・衝動性
 - ・実行機能（段取り）
 - ・切り替え
 - ・整理統合
 - ・見通し
- …等



注意の特性については、注目の仕方や、注意がうつりやすいかという転動性であったり、活動や物によっての集中の持続力や視野の広さについての状況に違いがでてくる可能性があります。また、衝動性や段取りをつけて物事を組み立てる実行機能、場面や注意を切り替える力、身の回りを整理する力や見通しを持って活動する力についても違いが見られることがあります。例えば、子どもたちの行動から見てみると一つの物やに吸い寄せられるように注意を向けていたり、または注目する情報が多くなるとなかなか注意が向きにくかったり、音や視覚刺激に過敏に反応したり、すごく細かい部分に注目しているようなお子さんもいるかもしれません。これは注目の仕方/転動性などの中の向け方の特性に違いが見られることがあるかもしれません。他には、物事の優先順位がなかなかつけられず、自分の興味の強い活動や目に入った活動から取り組んでしまうようなお子さんがいたり、机上の文房具などを整理することがなかなか難しいお子さんもいるかもしれません。これは、実行機能や整理統合の特性に違いが見られるかもしれません。注意の特性は、周りが理解して配慮する特性になることもあるので、一つの状況だけではなく、いくつかの場面の状況を見ていく必要があるかもしれません。

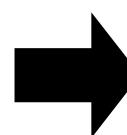
感覚や体の使い方の特性

感覚

- ・敏感さや鈍感さ
 - ・視覚（見え方／眺め方等）
 - ・聴覚（様々な音刺激）
 - ・嗅覚（様々なにおい刺激）
 - ・触覚
(触る、衣服、足裏感覚など)
 - ・味覚（偏食等）
- …等

体の使い方

- ・歩行姿勢等
(独特の歩き方、くるくるまわる等)
 - ・指先の使い方（不器用／器用等）
 - ・両手の供応（紙を持ってはさみを切るなど）
 - ・目と手の供応
(目で捉えた物に適切に反応できるか)
 - ・バランス感覚（アンバランスか適切か）
 - ・道具スキルのアセスメント（はさみ、ペン等）
 - ・多動性
(落ち着いて過ごす、じっと座っている等が苦手)
- ・姿勢保持（座った時の姿勢等）



感覚の特性は、いわゆる五感について感覚が過敏であったり、逆に鈍感であったりすることや、体の使い方では、姿勢保持の様子や手指機能の使い方、道具を活用するスキル、バランス感覚などについて違いが見られる可能性があります。例えば、子どもたちの行動から見てみると、掃除機やドライヤー、ジェットタオルなどの「特定の音に過敏に反応したり、またはとても暑い日でも長袖を着ていたりと温度に鈍感であったりするお子さんもいるかもしれません。これは聴覚や触覚などの特性に違いが見れる可能性があります。他にも、つまり立ちで歩いていたり、くるくる回っても目がまわらなかったり、うまく姿勢保持がとれなかったりするこどもがいるかもしれません。これは、体の使い方の特性に違いが見られる可能性があります。